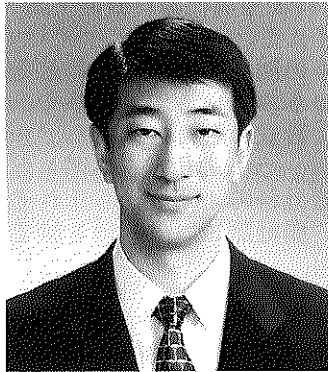


日常診療に
おける
補剤の使い方

4 十全大補湯の使い方



慶應義塾大学医学部
漢方医学講座 助教授
わたなべ けんじ
渡辺 賢治

十全大補湯の補剤としての特徴

十全大補湯は、補中益気湯と並び称される補剤の代表であるが、よく補中益気湯との区別について質問がある。補中益気湯は気が虚した気虚の状態に用いられる処方であるのに対して、十全大補湯は気血ともに虚した状態に用いられる補剤であり、補気剤の四君子湯と補血剤の四物湯をベースに、それに桂皮と黄耆が加わった処方である。

補剤としての十全大補湯は、補血作用のある四物湯が含まれていることに大きな特徴がある。この補血作用により、血虚の症状である脱毛や爪が割れやすい状態が改善し、口腔粘膜の炎症や痔などの粘膜障害に効果がある。また、造血作用を有することから、抗癌剤による白血球減少・貧血の軽減につながる。

十全大補湯の使用目標と適応

上記のように、十全大補湯は気血両虚が目標となる。具体的には、疲れやすい、だるい、食欲低下といった気虚の状態に加え、血虚が加わることによって皮膚のつやが悪い、皮膚が乾燥する、脱毛がある、爪が割れやすいといった場合には十全大補湯の適応となる。

多くの場合、慢性消耗性疾患が持続し、全身の栄養状態が低下している状態がこれに相当する。例えば、担癌状態が長引いて全身倦怠、食欲不振、衰弱、貧血、四肢の冷えなどを伴う場合、あるいは放射線や化学療法などの抗癌治療を受けて体が消耗した状態などである。また、膠原病などの進行によって体力が衰えた状態など、他にも様々な消耗性疾患にも使われる処方である。抗癌剤の副作用を軽減すること自体を目的に使用されることもある。例えば、当帰に含まれるリンゴ酸ナトリウムがシスプラチンと重合して出来た化合物が、シスプラチンの抗癌作用は保ったまま、腎毒性や肝毒性を軽減することが報告されている。これらに限らず、十全大補湯は癌のありとあらゆるステージに幅広く用いることのできる処方であるにもかかわらず、臨床の場ではまだまだ用いられる機会が

少ないのが現状である。

基礎的研究に関して、十全大補湯には数多くのデータがある。免疫賦活作用、栄養改善作用、吸収能の向上作用、抗癌剤の副作用軽減作用、骨髄幹細胞の増殖作用など、その作用は多岐にわたっている。これらの作用には、十全大補湯に含まれる10種の生薬がそれぞれ必要不可欠であり、多くの成分がそれぞれ別の役割を有することがわかっている。癌の転移モデルにおいても、その抑制や再発予防の効果がわかっているが、臨床の場においては長期研究が必要であり、良い臨床研究がないのが現状である。しかし、臨床的に幅広く用いられるためには臨床データも必要と考える。

表1に担癌患者の諸症状に用いられる漢方処方として、十全大補湯がいろいろな症状や状態に対して用いることができることが示されている。また、担癌患者の諸症状に対して様々な補剤が使用できることもわかる。

処方の実例(症例紹介)

ここで、癌患者の治療経過中に十全大補湯が有用であった症例を紹介する。

症例1:39歳,女性

現病歴:36歳時に左乳房の腫瘤に気付いたが、母の介護で忙しく、放置していた。1年後に時間ができ、病院で精査したところ乳癌と診断され、肺転移、リンパ節転移を伴っていた。CAF(シクロフォスファミド、アドリアマイシン、フルオロウラシル)療法を週一度受ける治療プログラムを開始したが、1回目で嘔気・食欲不振がひどく、また口内炎と下痢による痔が出現したため、漢方治療を希望して来院した。

経過:初診時には、漢方治療のみで抗癌剤を止めたいという希望であったが、漢方治療はあくまでも補助療法であり、癌を縮小する効果のないことを説明し、漢方治療とともに抗癌剤を続行するよう説得した。十全大補湯を処方し、2回目の抗癌治療に臨んだが、嘔気が少なく、口内炎、下痢が軽度であったために全身状態の消耗が少なく、3回目以降も受ける自信がついたという。6回治療を終了した時点で転移は消失し、原発巣も縮小したため全摘手術を施行した。手術後はタキソテールに変更しているが、経過は良好である。

考察:癌を漢方のみで治して欲しいという希望を持って漢方外来を受診する患者がいるが、基本的には漢方のみで癌を消失させることは非常に困難であると考えている。むしろ抗癌剤のスケジューリングを全うするために、漢方を補助療法として用いる方がその意義は大きい。この場合、漢方薬そのものが抗癌治療を減弱しないかという懸念が生じるであろうが、基礎研究レベルでそれは否定的である。

症例2:65歳,男性

現病歴:64歳時に黄疸を自覚し精査したところ、膵頭部癌が発見された。胆管にステントを入れ減黄したが、根治手術は不可能であり、化学療法を2クール行った時点で家族と話し合い、化学療法を続行しないことを決め、漢方治療を求めて来院した。身長165cm、体重55kgで、健康時よりも12kgの体重減少があった。

経過:抗癌剤による治療を勧められたが、脱力感が強く、何もする気がしないという。そこで、十全大補湯を処方したところ、2週間には食欲が出て食事が取れ

るようになった。4週間には体力がついてきたような気がするという。24週間後の現在、癌のサイズは増大しているが、患者は元気に身の回りのことできるようになり、草むしりもできるようになったと家人は喜んでいる。

考察:本例の場合、治療の目的はQOLの改善という点である。癌そのもののサイズを縮小することは困難であり、実際に増大しているが、食欲が増すことにより生きる意欲が湧いてくる。この場合も補助療法であるが、今後、こうした適応に対する十全大補湯の役割も増加していくものと思われる。

表1 担癌患者の諸症状に用いられる漢方処方

症 状	漢方処方	使用目標など	
全身状態の改善	十全大補湯	体力が消耗し、顔色がくすむ、皮膚が乾燥する、脱毛、爪が割れるなどの症状に用いられる。食欲不振が強い場合には補中益気湯、四君子湯などを選択する	
	補中益気湯	微熱、寝汗、手足の倦怠感を伴い、食欲が低下し、意欲が湧かない状態に用いる	
	人參養榮湯	十全大補湯の関連処方、肺痿などによる呼吸器症状や中枢症状がある場合に用いられる。また、空咳、不眠、不安などを伴う場合にも用いる	
癌に伴う諸症状	食欲不振	四君子湯	食欲不振が強く、貧血などで顔や唇が青白くなっている場合に用いる
		六君子湯	食欲不振に加えて胃もたれ感が強い場合に用いる
	下痢	人參湯	冷えの症状が強く、腹痛を起こすことが多い場合に用いる。また、嘔気もあり、生唾が多い場合にも用いる
		真武湯	午前中に冷えによる下痢が多く、顔色が悪いが、下痢の後には腹痛がない場合に用いる
	黄疸	人參湯	冷えにより腹痛を起こした場合に用いる。人參湯は主に胃に、真武湯は腸に作用する
		茵陳蒿湯	比較的体力は保たれているが、尿量が減少して便秘を伴う場合に用いる
浮腫	茵陳五苓散	茵陳蒿湯よりも体力が衰えていて、口渇、尿量減少がある場合に用いる	
	五苓散	水毒の状態に用いる。口渇、尿量減少に効果がある	
疼痛	茵陳五苓散	茵陳蒿には利尿作用があることから、黄疸がある場合に用いる	
	十全大補湯	全身状態を改善することで疼痛を緩和する	
	桂枝加朮附湯	胃腸虚弱者の関節痛のコントロールに用いる	
抑うつ	大防風湯	十全大補湯で疼痛効果が得られず、体力が消耗した状態に用いる	
	香蘇散	不安・焦燥感が強く、抑うつ的でふさぎがちな場合に用いる	
術後イレウス	半夏厚朴湯	不安、不眠、抑うつがあり、消化器症状、呼吸器症状、心悸亢進などを伴う場合に用いる	
	大建中湯	腸管の蠕動運動を促進することで創部との癒着を予防する	
抗癌剤の副作用	小建中湯	マイルドに腸管の蠕動運動を促進する	
	嘔気	人參湯	新陳代謝、血色が悪い場合に用いる。寒がりやで唾液量が多く、また下痢をしやすく疲れやすい状態に服用する
		小半夏加茯苓湯	悪心・嘔吐のある場合で、つわりや薬による胃腸障害に伴う吐き気に用いる
	脱毛	十全大補湯	毛髪の成長を維持する血液の栄養分が不足した状態(血虚)がある場合や、爪が割れやすくなったり、皮膚が乾燥してくる状態に用いる
	骨髄抑制	十全大補湯	骨髄幹細胞に作用し、造血作用を促進する
	便秘	大黃甘草湯	甘草が大黃の働きを助けてマイルドに便通を促す
		潤腸湯	高齢者で脱水症状があり、便秘がある場合や、コロコロ便の場合に用いる
桂枝加芍薬大黃湯		腹満、腹痛を伴う便秘に用いる	